

エリア

AREA

2004. 7. 14

No. 35

平成16年度国土交通省地域振興アドバイザー派遣・始まる

平成16年度のアドバイザー派遣が始まりました。今年度は20地域への派遣です（うち4地域は試験派遣、1地域はフォロー派遣）。5月には東京で「国土交通省アドバイザー派遣制度」平成16年度オリエンテーションが行われ、アドバイザーと受け入れ地域の担当者との顔合わせもでき、6月下旬から第1回の派遣がスタートしました。

このニュースレター「エリア」は、派遣地域とアドバイザーを繋ぐものとして、各年度3回発行しております。今年度の第1回目に当たる本号では、派遣受け入れ地域のご担当の方々に、「①派遣地域の様子、②派遣テーマ、③オリエンテーション時のアドバイザーとの打ち合わせ、④アドバイザーに期待すること」について、ご執筆いただきました。

宮城県／唐桑町

1. 派遣アドバイザー

稲生 信男（東洋大学国際地域学部助教授）
羽田 耕治（横浜商科大学教授）
福田 興次（福田農場ワイナリー代表）

2. 地域の様子

宮城県の最北東端に位置し、気仙沼市並びに岩手県陸前高田市に隣接する唐桑町は、東西南の三方を海に囲まれ、北西より南東に向って背梁が走る長さ20km、周囲約50km、総面積42.28km²のリアス式海岸を有する人口は8,535人の風光明媚な半島の町です。三陸の好漁場をひかえ、古くから漁業の町として栄えてきました。しかしながら、水産資源の減少や魚価の低迷、漁業従事者の高齢化や後継者不足など厳しい状況の中にあって近年は観光に対する期待が高まっています。

昭和39年に陸中海岸国立公園編入、加えて昭和46年に海中公園にも指定されており、町では昭和43年に「国民宿舎からくわ荘」、昭和59年に「ビジターセンター・津波体験館」、平成6年に「漁火パーク」を観光拠点施設として整備し、体験観光メニューの開発など受け入れ体制整備に積極的な取り組みを行ってきております。

しかしながら、観光ニーズの多様化や長引く景気低迷等により平成6年度をピークに年々減少し続けており、新たな魅力づくりが望まれています。

3. 派遣テーマ

「公益法人における収益事業の経営改善と観光振興策」

唐桑町観光振興協会は100%町が出資した公益法人です。「ビジターセンター・津波体験館」、「国民宿舎からくわ荘」、「漁火パーク」の3施設の管理を町より受託しています。15年度決算では、3施設とも赤字決算となっており、町から赤字補填として管理委託料が支出されています。町の財政も危機的な状況にあり、平成16年度より無制限的な赤字補填は行わない方向となっており、早急な改善が求められています。

4. アドバイザーとの打ち合わせ

第1回派遣時に、現地視察を行い現状と課題を把握し、受け入れ側と意見交換する中で今後の方向づけを明確にしていこうということになりました。

5. アドバイザーに期待すること

公益法人としてネックとなっている収益事業の経営改善についての指導・助言をいただきながら、本来の目的である魅力ある観光地づくりを推進し、交流人口増加に伴う地域の活性化を図る方策についてアドバイスしていただきたいと思っています。

（唐桑町観光振興協会 川村 満）

福島県／南郷村

1. 派遣アドバイザー

久木田 禎一（エヌビーエヌ代表）
高橋 功（北海道21世紀総合研究所調査研究部長）
長沼 修二（総合ユニコム常務取締役）

2. 地域の様子

南郷村は、福島県の西南端、南会津地方のほぼ中央に位置し、東西10km、南北13km、総面積119.5km²を有し87%は林野になっています。人口約3,000人の小さな村で、集落や耕地は村の中央を南北に貫流する「日本一遅い鮎つりの解禁」で有名な「伊南川」流域を中心に形成されています。周辺は越後山系の標高1,000m級の山々に囲まれ、村の中心部は標高529mの高冷地となっています。

当村は農業と観光が主な産業であり、特に農業では昼夜の気温の差が激しい気候を利用したトマト栽培が中心で、「南郷トマト」はブランドとして市場では非常に高い評価を得ています。

3. 派遣テーマ

「第3セクター運営による観光施設経営の健全化の方策について」

スキー場・温泉宿泊施設・日帰り入浴施設の観光3施設の活性化のため、平成12年10月に村営から第3セクターへ移行し施設運営を行っていますが、3年半を経過し

て経費の節減等により赤字幅は減少傾向にあります。しかし、具体的にこれ以上どのように進めていけばいいのか、行き詰まっている現状となっています。近郊には類似施設もあり、また、町村合併に向けての対応等、今後の経営の方向付けや具体的な戦略等についてアドバイスをいただきたいと思います。

4. アドバイザーとの打合わせ

現在までの第3セクターの経営データに関することや、観光全般について持参した資料やパンフレットにより現状の説明をし、内容を把握していただきました。その他、現在までのマーケティング状況についての資料の作成等の指示をいただきました。

5. アドバイザーに期待すること

村の観光の要となっている観光3施設は、地域振興に欠くことのできない施設です。経営を改善し観光産業の活性化を図り、物産開発等地域の人々の自主的な活動などの波及効果に期待しています。さらに豊かな自然環境などを有効活用した、地域ぐるみの村づくりにつながればと思っています。

(企画観光課 近藤 功一)

茨城県／鹿嶋市

1. 派遣アドバイザー

熊倉 浩靖 (NPO ぐんま代表理事)
佐々木 茂 (高崎経済大学教授)
帯刀 治 (茨城大学教授)

2. 地域の様子

鹿嶋市は、東京から約80km、東の太平洋、西の北浦に挟まれた南北に長い地形をしており、面積は約93km²、人口は約64,000人で、1995年に当時の鹿島町と大野村が合併し、市制を施行しました。

古来より鹿島神宮の門前町として栄えてきましたが、1960年代に始まった国家プロジェクト「鹿島開発」により、人口が急増し、産業構造も大きく様変わりしました。現在は、美しい自然と歴史的伝統を持つ一方、鹿島港を中心とする工業都市として、そして近年は、Jリーグ鹿島アントラーズのホームタウンとして、また、2002FIFAワールドカップの開催地として、広く国内外にその名を知られるようになりました。

2002年に策定した「新鹿嶋市総合計画」では、市民・事業者・行政の「協働」によるまちづくりを基本姿勢とし、①スポーツ先進のまち、②世界に羽ばたく人づくりを進めるまち、③健康で安心、快適に暮らせる福祉のまち、④みんなが誇れる美しいまち、⑤交流がつくる魅力と活力のある新しい産業のまち、⑥行政のスリム化と市民がつくるまちの6つの目標を掲げ、「夢フィールド 交流（ふれあい）のまち かしま」の実現に向け、各種の施策に取り組んでいます。

3. 派遣テーマ

「協働のまちづくり行動計画の策定について」

現在、協働のまちづくりを推進する市民組織として、「鹿嶋市まちづくり中央委員会」とまちづくりセンター

(10箇所) ごとに「地区まちづくり委員会」が設立され、活動を展開しています。

このうち、まちづくり中央委員会では、総合計画の目標ごとに6つの専門部に分かれ、課題整理や行政への提言についての話し合いが活発に行われています。

今回のアドバイザー派遣では、まちづくり中央委員会のこれまでの活動を踏まえ、市民と行政による「協働のまちづくり行動計画」策定に向けた進め方について、助言をいただくこととしています。

4. アドバイザーとの打合わせ

3人のアドバイザーが、それぞれ2つの専門部を受け持ち、単なる啓発や激励に終わらぬよう、具体的な事業展開に結びつくような計画づくりのためのアドバイスをしていただくことと同時に、地域自治区としてのあり方を先駆的に考える良い機会と捉え、まちづくり条例や自治基本条例制定を視野に入れた対応策を考えるという行政への宿題も課されました。

5. アドバイザーに期待すること

豊富な専門的ノウハウの中から、協働のまちづくり実践のためのヒントをいただき、行政への市民参加の拡充、市民活動の活性化・具体化のためのきっかけづくりになればと考えています。

(まちづくり推進課 堀田 博史)

茨城県／谷和原村

1. 派遣アドバイザー

佐藤 修 (コンセプトワークショップ代表)

2. 地域の様子

谷和原村は、茨城県南西部、首都から40km圏内に位置し、中央に広がる低地部と、東部及び西部の台地部からなっています。低地部は、筑波山を背景に美しい田園地帯が広がり、水量豊かな小貝川に恵まれ、古くから谷和原三万石と呼ばれている稲作中心の穀倉地帯です。西部に、村の玄関口である常磐自動車道谷和原IC付近に常総ニュータウンが整備され、東部では、平成17年度開業予定であるつくばエクスプレスの新駅の整備が行われており、新駅の整備と一体的に進められている区画整理事業により、今後、人口の増加が見込まれています。

また、当村では、来年の3市町村の合併に向けて、さまざまな事務事業について調整を図っているところです。

こうした中、心豊かな住みよいまちづくりに取り組み、新旧住民が融和する地域づくりや都市住民との交流などの新しいまちづくりが求められています。

つくばエクスプレス開発区域より北部に位置する城山運動公園（野球場）周辺は、当村では少なくなった「里山環境」を残している地域で、総合計画において「交流の拠点や場のネットワークの形成」をする部分に位置づけられており、平成13年度に一般公募及び公園周辺住民等からなる委員会を発足し、周辺整備の検討を行い、城山運動公園の周辺整備に係る基本計画を策定しました。その中で、市民農園、体験農園、里山環境保全の3つを連携させ、新旧住民が融和する地域づくりや都市住民と

の交流促進による地域活性化を図るため、城山運動公園周辺を住民参加型での整備を検討しています。

3. 派遣テーマ

「城山運動公園整備による地域づくり」

城山運動公園周辺整備の体制づくりや方向性を明確にし、「市民農園」「体験農園」「里山環境保全」を連携させ、交流の場として発展することにより地域の活性化を図っていければと考えています。

4. アドバイザーとの打合わせ

詳細の打合わせはこれからの予定ですが、事業方針に関する現在の状況をお伝えし、まずは「実践と並行する形での構想づくりや体制づくりをすることが大切」と伺っています。

5. アドバイザーに期待すること

城山運動公園周辺整備を進めていくために、「できることからスタートを切る」ことを基本とし、その中で、当村では住民参加による市民農園、体験農園、里山環境保全などの経験がなく、これらの体制づくりや手法、方策などのアドバイスをいただきたいと思います。

(総務課 菊地 正宏)

千葉県／栄町

<試験派遣>

1. 派遣アドバイザー

橋立 達夫 (作新学院大学地域発展学部教授)

2. 地域の様子

栄町は千葉県北部の利根川流域に位置し、東は成田市、南は印旛沼、西は印西市、北は利根川をはさんで茨城県河内町に接し、都心から45km圏、成田空港へは10kmの場所に位置する総面積32.46km²の町です。

昭和50年代から住宅団地の造成が進められ、昭和30年の合併当時8千人の人口は現在2万5千人となっています。

当町では、水と緑に恵まれた地域性を活かしたまちづくり事業を推進しており、観光分野におきましても、体験型の博物館である千葉県立「房総のむら」の開設、成田国際観光モデル地区の指定、観光協会の設立、また、平成14年には「房総のむら」の隣接地に、当町を訪れる多くの来訪客と地域住民との交流の場として、文化・物産などのPRや販売、食事の提供を通して地域の賑わいを図ることを目的として、栄町総合交流拠点「ドラムの里」が開設されました。

平成8年に誕生したイメージキャラクター「ドラム」は、龍伝説の残る町であることや夢を与えるという意味が込められ名付けられたもので、ドラムの里の名称をはじめ、各種のグッズが商品化されています。

3. アドバイザーとの打合わせ

オリエンテーションでは、町内に点在する史跡、首都圏自然歩道の紹介や「ドラムの里」直売施設・レストランの提供サービス、「房総のむら」の運営内容などについて話しあわれました。

4. 派遣テーマ及びアドバイザーに期待すること

町や観光協会で観光拠点施設として位置付けている「ドラムの里」や「房総のむら」の充実とその波及効果をテーマとし、アドバイザーの先生には、施設の運営方法

や更なる魅力づくりのための方策、また、町内に点在する史跡文化財や観光資源を活用した観光ルート化の進め方などについてアドバイスを頂きたいと思っています。

(地域振興室 大村 俊之)

東京都／日野市

<試験派遣>

1. 派遣アドバイザー

長谷川 岳 (YOSAKOIソーラン祭り組織委員会専務理事)

2. 地域の様子

日野市は都心から西に約35km、東京都のほぼ中心部に位置し、JR中央線、京王線、多摩都市モノレールが通っています。市の北部には多摩川、中央部には浅川が流れており、南部は緩やかな丘陵地です。また、年間を通じて幅広い年齢層の観光客が訪れる高幡不動尊、都立多摩動物公園、多摩テック、百草園等があります。市の規模は、平成16年6月1日現在人口171,033人、世帯数74,028世帯、面積は27.53km²です。かつては、農業中心の宿場町で「多摩の米蔵」ともいわれていました。

昭和30年代以降は、大規模な団地や住宅の急増が続き、工場群の進出により人口も増加してきましたが、豊かな自然を活かした水と緑の文化都市を目指し、発展を続けています。

3. 派遣テーマ

「新選組のふるさと」を活かした観光事業推進の方策

日野市は新選組副長土方歳三、六番隊長井上源三郎、新選組の支援者で天然理心流の佐藤彦五郎の生誕地で、平成16年1月から放映されているNHK大河ドラマ「新選組!」を契機に「新選組フェスタin日野」事業の一環として新選組関連市町村との交流、並びに市内の史跡の整備を進めています。

平成9年度より市民団体で実施している「ひの新選組まつり」は会津、函館等全国からも参加者があり、毎年3万人の見物客が訪れ、日野のお祭りとして定着しています。

このような背景の下、大河ドラマ終了後も、「新選組のふるさと日野」として継続的に観光客を誘致し、一過性の事業としてではなく、他の観光資源と併せて総合的に観光事業として定着させていく方法が課題となっています。

4. アドバイザーとの打合わせ

観光資源を活かしたイベント事業の活力のある運営方法として、先生のご経験から、地域の学生等の若い力やボランティアを活用した安定的な組織をつくり、成長させていくことが望ましいとの提案を受けました。

5. アドバイザーに期待すること

日野市は昭和40年代初めから住宅都市として発展してきており、高幡不動尊、都立多摩動物公園、新選組関連史跡等の観光スポットはあるものの、観光事業に対するノウハウが少ない状況です。今回の大河ドラマ終了後も新選組まちおこし事業を一過性の事業としてではなく、「新選組のふるさと日野」として継続的に観光客を誘致するとともに、新選組を含めた総合的な観光事業の整備と発展・定着させていく方法等について専門的なアドバイスを期待します。

(産業振興課 佐藤 和典)

1. 派遣アドバイザー

伊藤 雅春（大久手計画工房代表）

2. 地域の様子

瑞穂町は武蔵野台地の西部、都心から北西へ約40kmに位置し、東は武蔵村山市・埼玉県所沢市、西は青梅市・羽村市、南は福生市、北は埼玉県入間市に接しています。町の東部には狭山丘陵が広がり、豊かな自然を残しています。町の規模は、6月1日現在人口34,026人、世帯数12,799世帯、面積は16.83km²となっています。最寄駅はJR八高線箱根ヶ崎駅であり、当駅は17年度オープンに向け駅舎工事中です。駅の西口は、土地地区画整理事業を施行中で、駅周辺の様子が大きく変化しようとしています。また、道路状況は圏央道青梅ICに近く、国道16号や新青梅街道が通っています。また、町の南部には横田基地があります。

平成13年度西多摩地域入込観光客数調査によると、年間観光客数は35,000人で、そのうち日帰りの観光客は28,000人と、全体の8割を占めております。また、月別では特に5月が4,800人（14%）、11月が4,400人（13%）となっており、春季・秋季に日帰りの観光客が多い状況となっています。

3. 派遣テーマ

「観光資源の再確認と新たな資源の掘り起こし」

瑞穂町は、国道16号と新青梅街道（都道）が縦横に走り、交通の要所となっておりますが、観光客は新青梅街道においては都内から青梅・奥多摩方面へ向かう通過点となり、国道16号線についても川越・八王子間の通過点でしかない状態となっております。

町の観光資源は、狭山丘陵にある六道山公園や残堀川最上流の狭山池公園が、町を代表する名所となっています。また、かつての豪農だった建物を改修した耕心館もあります。しかし、いずれも地域を活性するほどの効果は期待はできない状態です。

このような中、既存の観光資源を生かしつつ新しい観光のアイデアを出すことで、多くの方が瑞穂町に訪れてくれるような観光施策が展開できればと思います。

4. アドバイザーとの打合わせ

新たな観光資源を発掘するために、観光振興委員会のほか、アイデアを出すための方法として、プロジェクトチームを結成することが望ましいと指導を受けました。プロジェクトチームの構成員の選出方法は、30～40人程度の選出で、女性が5割以上、年齢層も幅広く選出するよう要望がありました。

5. アドバイザーに期待すること

観光のアイデアを出すプロジェクトチームに対し、アイデアの引き出し方にアドバイスをしていただき、新鮮でかつ驚きのあるアイデアが出ることを期待します。

（産業振興課 佐久間 裕之）

1. 派遣アドバイザー

井原 満明（地域計画研究所代表）

木下 勇（千葉大学園芸学部助教授）

鱸 雅守（三州足助屋敷館長）

2. 地域の様子

氷見市は、能登半島の付根に位置し、北・西・南の三方を丘陵山脈に囲まれ、東方は富山湾に面しているなど、地形的に独立した圏域が形成されており、海と山がコンパクトにまとまっています。里山から海越しに望む立山連峰、海から里山棚田を望む景観はまるで天然の「円形劇場」の様相を呈しています。また、7本の2級河川により形成された6つの谷筋では、独自の風土・文化が育まれ、その空間には昔あった百か村の歴史・伝統・文化・生活習慣などが悠久のロマンとして語り継がれています。

氷見市においては、農山漁村の持つ豊かな地域資源を“ひみの宝”と位置づけ、地域住民が主人公となりそれらを保全・整備・活用することで多くの人々に氷見の良さをアピールする地域全体が博物館であるという思想に基づき田園漁村空間博物館づくりに取り組み、地域の活性化を目指しています。

3. 派遣テーマ

「都市と農山漁村の交流促進による地域の活性化」

氷見市は人口の減少傾向、少子高齢化が進むなか、地域の歴史・伝統・文化など有形無形の地域資源を展示物と捉え「地域全体が博物館」であるという思想に基づいた地域づくりを進めるうえで、地域資源をどう生かして都市との交流促進を図るかが課題となっています。

4. アドバイザーとの打合わせ

第1回目の派遣日程を数案づくり持ち帰って調整することとしました。第1回目の派遣初日は午後現地の視察を行い、夕方今回参画する市民との懇談会を持つこととし、2日目にアドバイザー別の意見交換も行うスケジュールとしました。

5. アドバイザーに期待すること

現在氷見市が市民とともに取り組んでいる田園漁村空間づくりをベースに、交流事業の企画や実施方法について具体的なアドバイスを期待しています。

「なるほど」、「それは思いつかなかった」と市民にいわせるような分かり易く斬新なアドバイスをお願いし、派遣の翌日から市民の取り組みが始まることを期待しています。

（ふるさと整備課 表 良広）

1. 派遣アドバイザー

井出 建（環境計画機構代表）

菅原由美子（菅原由美子観光計画研究所代表）

富田 宏（漁村計画研究所代表）

2. 地域の様子

珠洲市は日本海のほぼ中央に突出している能登半島の最先端に位置し、三方を海に囲まれ、対馬暖流が流れる

温暖で住みよいところです。大部分が標高100～200mの丘陵状の山地と、20～30mの間に分布する数段の海岸段丘、内海の海岸部に連なる狭い沖積低地に分けることが出来ます。外海の男性的な景観に対し、内海は波静かで女性的な景観が特徴で、北アルプス連峰を望むことができます。

昭和29年7月15日3町6村が合併し、面積246.94km²、人口38,157人をもって、石川県下5番目の市として誕生致しました。その後は、人口流出に歯止めがかからず第17回国勢調査（平成12年実施）では、ついに2万人を割り込み19,852人と市発足当時からその人口は半減するに至りました。

3. 派遣テーマ

「統廃合による空き校舎の有効利活用方策について」

今回対象とした『日置地区』は、能登半島先端の珠洲市においても最先端に位置し、海・山ともに自然豊かで市内有数の観光スポットを有しています。逆に、基幹的な産業は存在せず零細な1次産業があるのみとなっています。

市内に今後予想される公立学校の統廃合による同様な空き校舎等を如何に地域の声を反映した形で、「生きがいづくり」や「賑わいを取り戻す」ために有効利用しているのか、今後の市内のモデルケースとして位置づけをし、検討を開始致しました。

4. アドバイザーとの打合わせ

地域の方と多く面談するために、地元協議は夜間に行うこととし、第1回は、特に人材を含めた地域資源の発掘・確認を中心に行うこととしました。コーディネーター役の行政もさることながら、「地域の方の課題解決に対する意欲と行動力がすべて」、「女性の参加が重要」との指摘を受け、地元における意識高揚や役職にとらわれない選任など受け入れ態勢が今回事業の是非を左右すると感じています。

5. アドバイザーに期待すること

課題解決の切り口へのアドバイスもさることながら、最終的な具体化・実行までを見据えた取り組みを期待します。

（企画振興課 金田 直之）

福井県／丹南広域

1. 派遣アドバイザー

阿蘇 裕矢（静岡文化芸術大学教授）
前田 博（京都造形芸術大学教授）
南 賢二（ラック計画研究所代表）

2. 地域の様子

福井県丹南圏域は、福井県の中央部に位置し、日野川流域に広がった平野部（盆地）と、東西の山間部で構成されています。西部は日本海に面し、東部は福井県大野市、岐阜県と境界をなし、山あり海ありで豊かな自然に恵まれています。越前海岸では、夏は海水浴などのマリンスポーツ、冬は越前がにや越前水仙、磯釣りのメッカとして観光客が訪れています。平野部では、春から初夏にかけて

つつじ、花はす、鮎釣りや秋の菊、山間部では、夏のキャンプ、冬のスキーなど、四季折々の魅力があります。

また、歴史的文化遺産や史跡が多く存在し、観光拠点施設の整備も行っているものの、年々観光客は減少、特に宿泊客が減少傾向にあります。

本圏域にはJR北陸本線が縦貫しているほか、南北に北陸自動車道、国道8号、東西に国道417号等が通っており、北陸と関西・中京方面を結ぶ交通の要衝にあります。

本圏域の工業は電気精密機械や眼鏡、化学等が基幹部分を占め、中核都市である武生・鯖江を中心に県内の工業を大きく支えています。

また、古い歴史の中で受け継がれてきた越前和紙、越前漆器、越前打刃物、越前焼等の多くの伝統的工艺品産業があり、先端産業から伝統産業まで多種・多様な産業の集積を示しています。

3. 派遣テーマ

「地域資源を活かした観光振興方策について」

～丹南の観光資源を連携した魅力ある観光ルートの設定～

自然資源を活かし観光に力を入れている地域、産業振興と観光を結び付けたい地域、農業振興と観光を結び付けたい地域と分かれています。それらを連携した観光ルートを設定できたらと考えています。

4. アドバイザーとの打合わせ

丹南地域の観光振興に関わる前提条件として、広域組合の事業展開、丹南地域の現状と課題、合併の進行状況を確認したあと、今後の進め方について打ち合わせをしました。第1回目の派遣にて現地視察を行い、各地域の観光資源を確認したあとに、意見交換するなかで、今後の方向付けを明確にすることとなりました。

5. アドバイザーに期待すること

当圏域は京都と金沢というA級の観光地に挟まれ、11市町村それぞれに観光への取り組み方や資源性の相違もありますが、共通目的を持ち、丹南の観光資源を活かして、観光振興を図りたいと考えていますので、豊富な専門的知識や情報をいただき、さらには具体的、効果的な提言やご意見をいただきたいと思います。

（丹南広域組合総務課 一家 智美）

長野県／阿南町

<試験派遣>

1. 派遣アドバイザー

浦野 秀一（あしコミュニティ研究所所長）

2. 地域の様子

阿南町は、本州の中央に位置する南アルプスと中央アルプスに挟まれ、太平洋に注ぐ天龍川の右岸にあり、長野県の南端に位置しています。東西15.5km、南北18.2km、総面積123.35km²で、84%が森林を占め、農用地は7%に過ぎません。人口は約6,000人で高齢化率は36%を超えています。

昭和の大合併以降、著しい人口減少が続き、その対応策として企業誘致、社会福祉施設誘致による雇用の場の確保及び観光施設整備等を進めてきましたが、人口減少や少子・高齢化は今なお進んでおり、厳しい状況にあり

ます。そこで、市町村合併問題について広域連合や近隣町村との検討を重ねてきましたが、住民懇談会での意見や議会の協議結果を総合的に判断し「自立」を選択するに至っています。

3. 派遣テーマ

「協働のまちづくりによる総合計画の策定について」

第4次総合計画策定以降、当時の予想以上に時代が大きく変化してきたことや、景気の低迷とも相俟って財政的に厳しくなっており、ますます多様化・高度化する住民ニーズに対応することが困難になってきています。そのため、これら社会的、経済的情勢を踏まえる中で総合計画の見直しが必要になってきています。

自立したまちづくりを進めていくには、行政と住民双方の意識改革が必要であり、行政と住民が対等な立場で責任を共有しながら目標の達成に向けて取り組む「協働のまちづくり」により住民参加を進め、町民と行政の役割を明確にしながら地域の個性を生かした活力あるまちづくりが求められています。

しかしながら、行政主導によるまちづくりを長年行ってきたため、住民にはこうしたまちづくりは経験したことがなく、そのため会議の持ち方や議論の進め方、整理・まとめの方法等運営面へのアドバイスとともに、職員の意識改革についてのアドバイスをお願いし、新たなまちづくりのきっかけとしたいと思います。

4. アドバイザーとの打合わせ

「協働のまちづくり」を進めていくうえで、一番の抵抗勢力になるのは住民でなく役場職員である。役場職員の意識改革をまず進め、住民が「役場がどうも本気を出してきた」というムードを作らない限り「協働のまちづくり」は困難である。この総合計画の策定は役場職員の政策能力を高めることや住民と協働で行うためのいいチャンスであるとのアドバイスを受けました。

5. アドバイザーに期待すること

職員、組織の活力アップに向けたアドバイスと先進事例の紹介も含めてまちづくりを進めていくための体制や仕組みの在り方に関するアドバイスをいただきたいと思います。

(総務課 松澤 享)

長野県／松川村

<フォロー派遣>

1. 派遣アドバイザー

橋立 達夫（作新学院大学地域発展学部教授）

2. 地域の様子

松川村は、長野県の北西部、安曇野の北よりに位置しています。北西部に雄大な北アルプス連峰がそびえ、この北アルプスを源とする高瀬川に囲まれた平坦な地形となっています。気候は夏季高温、冬季小雪厳寒の内陸型で、水稻・果樹・野菜などの栽培に適しています。村の人口は一貫して増加しており、東部地域は良好な住宅地、西部地域は安曇野らしい田園風景が広がっています。また、平成9年「安曇野ちひろ美術館」がオープンし、「温泉宿泊施設すずむし荘」・「道の駅安曇野まつかわ」と

あわせて年間約50万人の観光客が訪れるようになりまし。村及び村民の環境も大きく変わってきていますが、来訪者の数は増加しても、目玉である美術館に集中し、村の活性化に直接結びついていないのが現状です。また、数年後には「国営アルプスあづみの公園（大町、松川地区）」の開園も予定されており、村の観光の果たす役割も大きくなると予想されます。

村固有の歴史と文化を大切に、安曇野らしい田園風景などを観光資源として、観光と基幹産業である農業や商店と連携した地域活性化を図る振興計画が急務です。

前回の派遣事業により、「21村づくり委員会」では観光と村の基幹産業であります農業で地域活性化を図るため「ちひろ美術館」周辺への計画を村へ「1 飲食・加工・体験施設、2 加工（直売）施設、3 花の村、4 情報発信体制等」の提言をしてあります。

3. 派遣テーマ

「農業と結びつけた地域資源の活用と施設整備のあり方について」の検証・21村づくり委員会の提言の「飲食施設」について真に村活性化に繋がるのか。

・経営及び運営方法について（試算の検証）

4. アドバイザーに期待すること

橋立達夫先生は、平成13年度の派遣事業の折りに来村いただいておりますので、提言の内容についてより良い検証をいただけることを期待しています。

(総務課 熊井 万代)

長野県／木島平村

1. 派遣アドバイザー

内田 文雄（山口大学教授）

吉田 慎吾（色彩計画家）

2. 地域の様子

木島平村は長野県の北東端に位置し、総面積99.31km²であり、東の上信越高原国立公園の連山を源流とする一級河川の樽川と馬曲川の扇状地に開けた西面傾斜の農山村です。

総面積のうち81%は山林が占め、豊かな自然を有しています。特にカヤの平高原は国立公園内にあって国の自然休養林にも指定され、国民的資産であるブナの原生林は日本一美しい森ともいわれています。

内陸性気候で寒暖の差が大きく、県内有数の豪雪地帯です。

村では昭和62年から「わが村は美しく運動」、平成7年度から「集落ソフト事業」等により、郷土の歴史・風土・自然環境をもとに、住む人みんなが心を合わせ自主的に周囲の環境をきれいにしていくことを通じ、美しい景観と快適な生活空間をつくりだし、人と自然が調和する村づくりを進めてきました。

平成12年度からは木島平村景観推進協議会が発足し、村の人材研修事業による海外研修生や景観サポーターが中心となり、村内の景観形成について話し合いを進めています。

近年、景観の重要な要素となる住宅は、これまでの茅葺き民家が時代の流れの中で消えていき、反対に大手住宅メーカーによる住宅建築などにより地域固有の風景が失われつつあります。

3. 派遣テーマ

「建築物等の色彩ガイドライン作成について」

村では景観推進協議会や木島平の家づくり研究会との協働により、地域の景観に合う住宅について検討を進めておりますが、その中で屋根や外壁などに使用する色彩の設定に苦慮しています。

村内の建築物や景観に関する色彩調査等の実施により、住宅を中心とした色彩ガイドラインについて住民合意のもと作成したいと考えています。

4. アドバイザーとの打合わせ

第1回の派遣時に現地を調査し、受け入れ側との意見交換をする中で今後の方向付けを明確にしていこうとの話がありました。また、色にこだわるのではなく、建築物の素材や質感が大切であり、住民が良いと思う色や村の基調となる素材探しを行ったかどうかの提案もありました。

5. アドバイザーに期待すること

村には自然保護条例があり、特定地域（条例では自然休養地と呼んでいる。）内での開発行為について、建築基準を設けたり色の指定をしたりして乱開発を規制していますが、集落部の建築物については色の指定が無く施主の希望によるため、村全体としては様々な色が使用されています。

もとより村内統一した色調の景観形成を目指すのではなく、アドバイザーの助言により、色の選択基準やバランス感覚について住民の合意形成に役働いたと考えています。

（村づくり推進室 小林 正俊）

愛知県／田原市

1. 派遣アドバイザー

伊藤 光造（地域まちづくり研究所代表）

本田 節（ひまわり亭代表）

松田 猛司（クラブノアグループ代表）

2. 地域の様子

谷ノ口地区は、田原市の農業生産額全国第4位を支える農業の盛んな地区（世帯数62戸、住民数250人）で、渥美半島の片浜十三里と呼ばれる白い砂浜や海食崖を一望できる自然環境の豊かな地域です。砂浜では、海釣りや地引網が楽しめるほか、年間約17万人のサーファーも訪れていますが、近年は農地の荒廃、農村生活環境の悪化や、年々深刻化する海岸侵食への対応、観光地引網の後継者不足など多くの問題を抱えつつ、現状の不満を内に秘めながら改善の機会をただ待っていた地区と言えます。

谷ノ口地区では、多数の海岸来訪者が地区内の狭く入り組んだ道路に迷い込み、時には事故を発生させる等、住民生活を脅かすといった問題も発生しています。また農地基盤整備の機会を逃したことによって傾斜のきつい

非効率な農地が点在し、効率的な農業経営に支障をきたしているほか、農業後継者不足等、今後の農業振興に多大な不安を抱えています。

しかし、多様な問題の解決に向けた整備を進めていくために、地区において現状の把握を行い、計画づくりを行っていますが、地区自体も後継者不足であり、地区の持続のあり方及び地区内外の協働による地域の活性化について、地区に見合った手法により新たな地区形成を実行しなければならないのが現在の谷ノ口地区です。

3. 派遣テーマ

「地域資源を活かした地区活性化方策及び農業・観光振興策」

後継者不足の問題を抱えた地区では、地区内住民を総動員しても地区行事の運営を担う人材が不足しています。現在の状況が数年続けば谷ノ口コミュニティの崩壊も必ず訪れますが、幸にして当地区には年間十数万人の海岸来訪者が同地区を訪れる（または幹線道路を通過している）状況にあります。地区内外の住民が互いに助け合い協働して地区を持続させるとともに、同地区の経済振興に結び付ける方策を次のテーマを切り口に取り組んでいこうと考えています。

①谷ノ口コミュニティにかかわる事

～谷ノ口地区における平成の改革～

②地域資源（海岸・海岸来訪者たち）の活用策

～おらが村で活かして使って～

③女性にかかわること

～女性の知恵袋で村再生～

4. アドバイザーとの打合わせ

地域資源を活かすノウハウを持たない私達に、色々な角度や切り口から地区の参考となる事例や活性化策を提案いただきながら、同時にコミュニティ改善に取り組むべき必要性を助言いただきました。

5. アドバイザーに期待すること

活かすところ、改善するポイントをご指摘いただき、行政や住民の考え方に新たな風を送り込んでいただきたいと思います。

（企画課 加納 達也）

京都府／日吉町

1. 派遣アドバイザー

藤原 洋（シーズ総合政策研究所所長）

麦屋 弥生（フリープランナー）

山中 知彦（都市建築研究所代表）

2. 地域の様子

日吉町は、京都市の中心から北西約40kmに位置し、車や電車で約60分圏内に立地します。総面積123.5km²でその内約87%が森林です。

本町には平成10年に“地域に開かれたダム”「日吉ダム」が完成し、その周辺整備として温泉複合施設「スプリングスひよし」を建設しました。オープン以来、都市近郊のレクリエーション施設として多くの来訪者が訪れることになり、その後地域文化を紹介する施設「日吉町郷土資料館」や「サイクリングターミナル」、京都府立森

林公園「府民の森ひよし」等も整備され、日吉ダム周辺のレクリエーションエリアの形成が図れました。

「スプリングスひよし」の温泉・プール・体育館は、町民の間でも健康増進の場、住民交流の場として多く利用され、特産品売場でも土産品の販路拡大により、ふるさと産品の開発や農林産物の生産意欲向上にも結びついてきました。

しかし、開館後5年が経過する中で、近隣に同類の温泉施設ができたことも影響し、来場者・売上高とも年々減少する傾向になってきました。

「スプリングスひよし」の施設運営は第3セクターの「日吉ふるさと株式会社」が行っていますが、「公共性重視」と「利益追求」との狭間で人員整理も含め厳しい経営環境が続いてきており、公共施設としての在り方についても抜本的な見直しが必要となってきています。

3. 派遣テーマ

「持続可能な都市交流施設の経営、特色ある温泉施設づくり」

日吉町では、ダム周辺施設を中心に交流人口を100万人に増やすことを目標にしていますが、この実現には「スプリングスひよし」の発展と運営にあたる第3セクターの経営強化が最重要課題となり、今回はこの日吉ダム周辺地域に範囲をしばり込み、施設の運営状況の調査などを行っていきます。

4. アドバイザーとの打合わせ

1回目にアドバイザー全員が揃って現地を実際に見て、2回目に施設関係者等と意見交換・議論したあとアドバイザーから課題を上げてもらい、3回目に課題解決に向けた研修を行うことになりました。

5. アドバイザーに期待すること

「スプリングスひよし」は地域の健康増進施設としての役割を果たしていることや地域経済の起爆剤としても期待されていることもあり、この施設が存続していけるように、外部からの視点で第3セクターの経営向上対策について豊富な専門的知識・情報等を提供いただきたいと考えています。

(企画推進課 吉田 航)

島根県／日原町

1. 派遣アドバイザー

大川 信行 (東日本国際大学教授)
田邊 大輔 (地域生活総研バリーオ代表)
光多 長温 (鳥取大学教育地域科学部教授)

2. 地域の様子

日原町は、島根県の西部、山口県境近くに位置し、広島市、山口市まで車で1時間、熊本市まで4時間、島根県の県庁所在地である松江市まで4時間もかかる町でもあります。隣接の益田市、山口県が生活圏域となっています。

町を南北に国道9号線、JR山口線が走り、高度経済成長期までは、農家が生産した木炭、絹糸、農産物の出荷に大いに利用されてきました。

土地の92%が山林で、木炭産業の衰退後は、生計を維持するため、多くが第2種兼業農家に移行し、不要な労

働力は都市へ吸収されていきました。現在の人口は約4,300人、高齢者比率36%です。

これといった特徴のない町のシンボルにしたいと、ハワイ島マウナケア山にある世界最大の反射型スバル望遠鏡の10分の1の縮尺である実験用の鏡を設置した日原天文台を昭和60年に建設しました。当時は、日本一大きな望遠鏡のある町として、一躍脚光を浴びました。

しかし、ナンバーワンの座も長く続かず、現在、オンリーワンの方向で町政振興策を再検討する状況となっています。

3. 派遣テーマ

「山村第3セクターの経営」

本町では、昭和60年代以降、町が建設した施設について、第3セクターを発足させ、維持管理のみならず、利益追求をも目的にしました。当初は、民間活力を利用して、行政にない経営感覚のもと、地域経済の核となつてほしいと期待されました。

現在、天文台関連施設、廃校活用施設、道の駅関連施設に第3セクター会社が設置されていますが、経営的には困難な状況にあります。

町の管理委託の見直しや会社の整理を含めた抜本的見直しを行うため、参考意見(アドバイス)をもらおうと考えています。

4. アドバイザーとの打合わせ

4月の人事異動により、本町担当者が変わったことから、おのずとそのスタンスも異なるため、その辺りの説明に多くの時間を費やした感があります。

町としては、問題点の本質(経営の問題点)の見極めを、今後の方向の提案等に優先してお願いしました。

5. アドバイザーに期待すること

第3セクターの運営に手詰まり感があり、焦燥する関係者に、問題点の本質の見極め方と整理方法、発想の転換を与えていただきたいと考えています。

(産業課 田村 津与志)

岡山県／寄島町

1. 派遣アドバイザー

金井 萬造 (地域計画建築研究所代表取締役)
島村美由紀 (ラスアソシエイツ代表)
野口 秀行 (日本政策投資銀行/地域政策研究センター主任研究員)

2. 地域の様子

寄島町は、岡山県西南部に位置し、南は瀬戸内海に面し、総面積は9.01km²ですが、山が迫る僅かな平地の中に居住区域を確保しており、新たに住居を建設する平地の確保は困難な状況です。

このため、近隣市町への人口の流出が後を絶たず、人口は年々減少し、また高齢化も進展し、平成12年度には過疎地域の指定を受けることになりました。

寄島干拓地は、この面積9.01km²の狭隘な町にあって、町のほぼ中央に位置し、唯一のまとまった100haを超える平地であり、町の東西軸となる主要地方道に直結し、利便性も高く、これからのまちづくりの核となるエリア

として位置付けられています。

寄島町は、平成12年度から、若者定住促進及び過疎地域からの脱却のため、干拓地内における幹線道路や下水道整備等のインフラ整備をはじめ、町民スポーツ公園やふれあい交流館の整備を進めています。

また、同干拓地内に理学・作業療法士を育成するための専門学校が誘致され平成14年4月に開校したほか、民間による分譲住宅地の開発も現在進められています。

今後も、行政、専門学校、民間企業そして地域住民が一体となり、寄島町の特性を活かした干拓地の利用促進を進めていきたいと考えています。

3. 派遣テーマ

「人と地域資源が輝くまちづくり」

整備が進む寄島干拓地ですが、干拓地全体の利用計画の中で、特に利用価値の高い商業ゾーンについて、「人と地域資源が輝くまちづくり委員会」を立ち上げ協議を行います。委員会は、商業ゾーンの具体的な利用計画を策定するのが目的ですが、干拓地全体を活かしたまちづくりという観点から協議を進めます。

4. アドバイザーとの打合わせ

町には、アイデアを持った人がたくさんいるはずなので、中学生や高校生の意見募集等を行っても良いと思います。とにかく、皆で楽しいことをやっていくというスタンスが大切です。

都会との交流や、寄島の良さである海を活かしたアイデアを出すこと。また、色々な人がこの事業に参加できるしくみをつくるのがポイントです。

5. アドバイザーに期待すること

寄島干拓地を活かしたまちづくりを推進していく上で、最も重要なのは、その地域に住む人々が積極的に、楽しみながら「まちづくり」に参加できる体制づくりであると思います。アドバイザーの方々には、専門的な立場でその体制づくり等についてアドバイスをお願いしたいと考えています。

(総務課 高倉 道雄)

山口県／長門市

1. 派遣アドバイザー

遠藤 聡 (国土開発センター富山支店理事)
黍嶋 久好 (豊根村若者総合センター所長)
宮口 侗迪 (早稲田大学教育学部教授)

2. 地域の様子

本市は山口県の北西部にあって、北は日本海に面し、南は中国地方の支脈が西走しており、恵まれた自然環境、歴史、文化遺産などを有しています。

昭和29年に2町2村が合併して市政を施行し現在に至っており、今回アドバイザー派遣を受入れる俵山地区は、旧俵山村で、市の南西部の山間に位置し高齢化・少子化による人口の減少が著しく、平成12年の国勢調査では人口1,587人となり、10年間に303人が減少、高齢化率は37%と市内でも高い地区となっています。こうした地区の中心部に俵山温泉があり、昭和30年に厚生省より国民保

養温泉の指定を受けて滞在型の温泉地として利用されてきましたが、観光客は年々減少傾向で平成6年に年間17万1千人の観光客が平成15年には11万5千人と3割を超える減少となっており、この傾向は近年特に著しくなっています。

こうした中、平成11年2月に新しい時代に向け、魅力ある故郷の創造を目指すとともに青年層の意見を地域づくりに反映させることを目的に、「青年部会」を立上げ新たな活動に向け取り組みを開始しました。そのひとつとして、平成14年に第1回目の「蛭祭り」を青年部主催でスタートさせ、地域内外からのお客で賑わいました。地区を流れる木屋川流域はゲンジボタル発生地として、昭和32年に国の天然記念物の指定を受けており、時期になると毎年蛭の乱舞が鑑賞できます。

3. 派遣テーマ

「地域資源と温泉を活用したグリーンツーリズムの取組」

平成15年度、山口県日置農林事務所が主体となり、「グリーンツーリズム資源点検ワークショップin俵山」を開催、地区内外の住民、行政機関が一緒になって地域を散策し、地域資源マップを作成したことで地域の良さを再認識しました。この取り組みを地域活性化につなげようとの地域からの声を受けて、グリーンツーリズムの取り組みを検討することとなりました。

4. アドバイザーとの打合わせ

グリーンツーリズムの取り組みをテーマとしているものの、地域住民を始め受入れ主体となる青年部会も手さぐり状態であるため、第1回目については、地域の現状や全国の事例・取り組みの心構えについて話し合うこととしました。

また、グリーンツーリズムを成功させるためには、地域全員の参加を前提にするのではなく、興味を持っている人・やる気のある人を集めることが大切とのアドバイスを受けました。

5. アドバイザーに期待すること

資源点検により、自然、人、もの、文化などグリーンツーリズムの資源になり得ることが確認できたので、こうした資源と温泉を活用した地域活性化の取り組みについてアドバイスをいただき、グリーンツーリズムが地域に定着することを期待しています。

(農林課 穴村 龍夫)

山口県／錦町

1. 派遣アドバイザー

市村 良三 (ア・ラ・小布施代表)
高橋 寛治 (前飯田市産業経済部長)
寺川 重俊 (寺川ムラまち研究所代表)

2. 地域の様子

錦町は山口県北東部に位置し、西中国山地国定公園の一画にあります。東は広島県、西は島根県と接しており、面積は210.32km²と広範に及んでいます。昭和30年に一町二村が合併し、当時の人口12,320人をピークに減少の経過をたどっています。

中心地の広瀬地区は、町の南部にあり役場や金融機関などが集中しています。そこには古くから栄えてきた商店街もあり、人口の減少とともに近年その活力が衰退してきています。

そうした中、老朽化した役場庁舎の改築をすることが議会で承認されました。町長は、諮問機関としての検討委員会を設立し、16人の委員で位置や構造などを検討しました。検討の結果、現在の位置は、商店街の一角で便利はいいですが、手狭であるため、錦川を挟んだ対岸に（約100m）移転して建築することとなりました。また、現庁舎の跡地については、商店街の活性化のために有効に活用しようということで、意見がまとまりました。

この広瀬地区は、第3セクター（株）錦川鉄道が経営する、錦川清流線の終着駅でもあり、錦町の商工会や観光協会が協力して、まちぐるみ博物館を設置しています。これは清流線利用者の受け皿づくりとして、商店街の空き店舗を使って伝統文化を紹介したり、古くから伝わる史跡などを紹介して、1～2時間で街を歩くことができるものです。ボランティアガイド等も行っており、来訪者からも好評です。

3. 派遣テーマ

「役場庁舎の跡地活用と商店街活性化について」

役場の跡地の活用については、住民などからいろいろな意見が出されていますが、商店街の活性化と連動できる仕組みづくりなど、専門的な分野からのアドバイスをいただきたいと考え、今回の派遣事業を活用させて頂くこととしました。商工会青年部が受け入れ団体として、体制を整えています。

4. アドバイザーとの打合わせ

町の概要と、庁舎建て替え等の現状を説明しました。町と商工会や商店街の方々がかかなり本気で取り組まないと、なかなか動かない問題であることから、一度町長とよく話し合って進めたいとのことを了解して持ち帰りました。

5. アドバイザーに期待すること

町の置かれているいろいろな条件を加味しながら、町にとって最善の方策などをアドバイス頂きたいと考えています。

（地域振興課 三浦 成寿）

熊本県／あさぎり町

1. 派遣アドバイザー

安藤 周治（中国・地域づくり交流会副会長）
河部 真弓（いまあネット専務）
玉田 孝二（都市環境研究所九州事務所所長）

2. 地域の様子

あさぎり町は、熊本県の南部、球磨盆地の中央に位置

し、宮崎県えびの市に隣接しており、日本三急流の一つに数えられる球磨川及びくま川鉄道が町の中央を東西に走っております。本町は、平成15年4月に旧5か町村（上村、免田町、岡原村、須恵村、深田村）が合併して誕生した町で、面積は159.9km²、人口は約18,000人の過疎の町です。

当地域は、球磨川の清らかな水と肥沃な土地を活かした稲作が盛んな地域で、特産品の一つに上げられる「球磨焼酎」は、今から約400年前から造られ、世界ブランドにも指定されており、町内にも5軒の酒造場が残っております。また、町内には明治後期から昭和初期にかけて造られた、米を貯蔵する石倉が多数現存しております。この石倉は、大切な米を貯蔵するため「豊かさ」の象徴として昔から大切に保存されてきました。

合併前、旧5か町村において、それぞれの地域づくり団体が活動が続けておりましたが、合併を機に解散した団体もあり、合併後の地域づくり活動の体制を早急に整える必要があります。

3. 派遣テーマ

「町村合併に伴う今後の地域づくりのあり方」

合併前に旧免田町では、JAと商工会の青壮年部が主体となり、地域づくり講演会や交流会等を実施してきましたが、町村合併に伴いこれらの組織も統合されたため、地域づくりに向けた新しい枠組みを作る必要が生じていました。そこで、従来から活動していたJAと商工会の青壮年部に、女性の観点から地域づくりを考えるため、JA及び商工会の女性部をメンバーに加え実施することになりました。しかし、4つの組織の会員数が千人を超え、実効性ある事業実施が難しいと判断されたため、本年度は、町職員や一般公募を含めた約20名のメンバーに絞り込み人材育成を主眼とした事業を行うこととなりました。

4. アドバイザーとの打合わせ

今回の打合せにおいて、あさぎり町の地域づくり現況について説明しましたが、合併して間もないこともあり、何が問題でどう解決していくのかという具体的な内容まで見えていないという指摘がありました。そこで、まず、地域住民が地域の良さを発見するような取組みとして、スクランブル的な地域探検からスタートしようということになりました。また、今回のアドバイザーは、地域づくりの全体的な底上げというよりも、人材育成を目的に実施することを確認しました。

5. アドバイザーに期待すること

今回の受け入れを機に、町内でも地域づくり活動が活性化し、新たな地域づくり人材の発掘はもちろん、魅力ある取組みが展開できることを期待します。

（企画財政課 沖松 勝彦）

編集・発行

〒100-0011 東京都千代田区幸町2-1-1 飯野ビル717
財団法人 日本地域開発センター
TEL. 03 (3501) 6856 FAX. 03 (3501) 6855

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3
国土交通省都市・地域整備局地方整備課
TEL. 03 (5253) 8404 FAX. 03 (5253) 1588